山脈

ある朝、川べりに出て山を見てゐたら
お早うといふこゑがした。
わたしもお早うと言ふた。
奥山に雪がはじめて此處から見えてゐる、
斑ではあるが昨日より嚴然としてゐる。

雪に

雪ふかく
山河のすがたも見えず
茫々たる雪のなかにわれは老ゆると——。

からたちの花

白き前垂れしめ
荒れたる庭に衣干せる
古きよき人を見過しゆけば
からたちの花あまく酸えゆくふるさと。

かたみにひとみ合すとも
よしなき姿のみ古びゆく。

机に寄す

秋ばかりなる人を主人（ぬし）にもちて
何の古さをほこるらん、
きのふわが庭風に吹かれ
わが拙なき文乗せ据えれど

明日のあるじの何とて知るを得るべきぞ。
わが娘生ひ立ちゆかば、
あるひはいろはをば習はん
われそのいろはをば教へん。

時のへだたり机のほとりに佇ずみ
わが疲れ、文の上にあるとき
われ片肘かけて思ふなり、

そのむかし文書きしひともかくは思ひて
よしなく寂しき暮しせるならんと、
庭蒼き草を眺めつ。

夜が來た

こどもが來て
おやすみなさいと言つておじぎをした、
机のこちらでわたしもおやすみなさいと云ふた
美しい彼女は去つた
おやすみなさい。

明　日

明日もまた遊ばう！

時間をまちがへずに來て遊ばう！

子供は夕方になつてさう言つて別れた、

わたしは遊び場所へ行つて見たが

いい草のかほりもしなければ

樂しさうには見えないところだ。

むしろ寒い風が吹いてゐるくらゐだ。

それだのにかれらは明日もまた遊ばう！

此處へあつまるのだと誓つて別れて行つた。

寂　鮎

川を覗いても鮎はゐない、
鮎は寂びて下流へ落ちてしまつた。
川の中にうつくしい姿は消えた、
川岸に住んでゐるものはこんな事にすら

ほとほとと寂しいノツクをせられる。
瘠せたさもしい雑魚のむれが、
泥の澱んだ水に物憂く動いてゐるだけだ
手を叩いて見る
みんな悲しげに散つてしまふ。

朝餉

朝まだきに眼をさましたら
硝子戸の遠くに日のあたつた町があつた。
その庭に赤い實の垂れた草があつたので
机の上に置いて眺めてゐたら

溫泉(ゆ)どころの女が來て
その草の實を硝子戸のそとへ棄てた。
わたしは默つてひとりで朝餉をたべたあと、
その草の實をまた机の上に拾ひあげた。
日はまだ遠くの町の上にある
わたしは草の實を女が來たときも
手の上にすえて見惚れてゐたのだ。

何時も釣をしてゐる子供

川べりの石の上に蹲んで
いつも釣をしてゐる子供がゐる
小さい魚籠には雑魚が一つ三つゐるばかり
雨がふると木の下へかくれ
晴れるとまた釣をしてゐる。

雑魚は糸を外れたり餘處へ泳いで行つたり
子供はそのたびに淋しい顔をして
空のうつる水の上を凝視めてゐる
何處の子だか知らない
よごれた着ものをつけ

寒い水涕をしめらせ
ゆがんだ顔つきになる水面を眺めてゐる。

いつも釣をしてゐる子供よ
もう日の暮れ近いのに
なぜに君は糸を巻いて歸らぬか、
水の上はどろりとした蒼みをふくみ
さざなみ一つ立たぬ靜かな中に

子供はひとり殘されて
好きな釣糸をうごかしてゐる。

土手

川べりの朝早い土手の上に
女の子がダンスのおけいこをしてゐる。
薔薇の花をむしり散らしたやうな形が
あちこちに印せられてゐる。
白い服をきてゐる日には靜かな白い鶴の樣に見える。

いなご

寒さが深くなると花はいちけて
河原の風に吹かれてゐる。……

子　供

うちの子供は咳をする
そして吸入の霧のなかから
くれなゐの顔をぽつたりと露き出して
優しくほほ笑んでゐる。

うちの子供はシクラメンの姉さん、
そして昨夜の雪のいもうと。

少女の中の少女に

子どもよ
熱を出すな
病氣をするな
なるべく靜かにふとつて呉れ。

そして大きくなつたら
ひと一倍美しい少女におなり
少女の中の少女に
みんなが羨むやうな美しい少女に。

あさぜみ

まだ日のあたらぬ間に朝蟬が啼いてゐる。
遠い森の奥、どこか幽遠な世から聞えるやうである。
あさぜみの啼くのを聞き
乳母車を押しながら私は散歩してゐる。

石白く寂しいふるさとの川邊の土手の上、
これが自分の姿であるか？
土手から見えるものは茫々たる磧の風景ばかりだ、
その風景の果に見えるものは山と山との重疊。

野あそび

子供を野に出して放すと
白い鶴のやうになつた。
赤とんぼは紐を引いて
草の上になびいてゐる。

縁側

春先きの縁側で
冷たいたまごをわたしは抱いてゐる
病しげな心ではゐないが
たまごを抱いて見惚れてゐる。

松　風

川波が下流からの風に吹きむしられ
そそけ立ちながら
悲しげな皺をたたんでゐる。

何處か遠いところで
皓々と松風が鳴つてゐる。
山の上かも知れない
この中に何ものも沈んだ色を見せてゐる。

椿

白い椿のほつれたやうな顔だ
この顔に對うてゐるものは何も考へない。
白い椿のことばかり考へてゐる。

夜明

穴のまはりには夜の明りが誘ひに來て
きりぎりすは
もう宵の程に穴を出てしまつた。

綠の荒野

毒のある蝶ほど粉つぽい、
虹のやうに美しい。

毒のある蝶でもいいから
ひとりくらい道づれになり
荒れた綠の中をあるきたいものだ
荒れた綠の中には
まだ蝶が紛つぽく逍ふてゐる。

寒　さ

草深い田舎にゐると
その寒ささへ匂ふて來る
自分が動くとその寒さも動く。

田舎に居れ
田舎にねむつてゐたら
すこしは心がらくになるであらう。

寒　さ

草深い田舎にゐると
その寒ささへ匂ふて來る
自分が動くとその寒さも動く。

田舎に居れ
田舎にねむつてゐたら
すこしは心がらくになるであらう。

日記詩錄

季節の色どり匂ひのみを撰りあつめ、幽かなる便りとはせんためなり。すべて予が故郷にありし日の日記の端にしるして、ゆくゆく何か心にとどまれるものを再びかへり見んよすが也。もし問ふ人ありてわが故郷の風物の斯くは寂しをりに富めるを喜び哭れむには、予が心充ち足らへるなり。

雪

をりをりの雪
夜に入りてつもる
誰か人むれてしづかに話せるごと思ほゆ

三月十五日

雪

夜來の雪
ふかぶかと明るき朝日の中に
まぶしき朝の喜びとなりたり

三月十五日

ゆふつ方

ひるすぎ晴れ、
ゆふつ方雪となる
ゆふつ方もの音の鈴きこゆ。

三月十七日

梅

風さむく粉雪をりをりなり。
垣根の梅散る。

三月十七日

歩み

春らしき雨なれど、
折々みぞれ交れり。
そのみぞれの中に梅の匂へるを聽く。

三月二十六日

花びら

子供ら川べりのさくらに礫を打ち
その花びらを落せり。

四月十七日

殘雪

山々の殘雪うつくしく
かすみかかりて見ゆ。

四月二十九日

置露

乳母ぐるま我の曳きつゝ
土手のうへを歩みしほどに
川原の草の上に早や露のけはひしぬ。

七月七日

川べり

月の夜なれば
川ぎしに椅子もち出し
われらひそかに涼みをやりにき。
古き田舎の川べり。

詩集　鶴　畢

七月十四日

昭和三年九月廿日印刷
昭和三年九月廿五日發行
初刷一千部

詩集・鶴
定價金貳圓

著者　室生犀星
發行者　金兒農夫雄
東京市小石川區白山前町二四

發行所　素人社書屋
振替東京一五九九四番

印刷所　信成社印刷所
東京市牛込區鶴巻町三〇六
印刷責任者　道又好三
製本責任者　井上泰次

素人社出版詩書

萩原朔太郎著	室生犀星著	尾崎喜八著	井上康文著	岡本潤著	小野十三郎著	目次緋紗子著	井上、陶山、中西金子、尾崎、勝、著	井上康文著
詩論と感想	詩集 鶴	詩集 曠野の火	詩集 手	詩集 夜から朝へ	詩集 半分開いた窓	詩集 風貌	詩華集纂 火	詩の作り方
四六判三百余頁 最上製箱入	四六判二四〇頁 最上製箱入	四六判一二八頁 洋布上製箱入	四六判二百頁 最上製箱入	四六判一二八頁 紙装極美	四六判一六〇頁 紙装極美	四六判二百頁 最上製箱入	四六判二百頁 紙装極美	菊半截一五〇頁 最上製美本
價壹圓八拾錢 稅十二錢	價二圓 稅十二錢	價壹圓七拾錢 稅八錢	價貳圓 稅八錢	價壹圓 稅六錢	價七十錢 稅六錢	價壹圓五拾錢 稅八錢	價壹圓二十錢 稅八錢	價五拾錢 稅四錢

詩歌俳句自由日記	創作手記
菊半截四百頁 總洋布上製極美	特價五〇錢 稅六錢

東京小石川白山前町二四◦振替東京一五九九四

582
214